伝記事実の〈混乱〉と〈再確認〉

——太宰治弘高時代の席次について

鶴谷憲三

はじめに

文学上の研究の中でも、伝記的事実のそれは労多くして実り少なき最たる分野と言っていいのではなかろうか。気の長くなるほどの時間、棒のようにひきずる足、そしてそれらを保証する財力の裏付け、さらには取材した事実と他者のそれについてとの整合性の確認等、いずれを考えても並々ならぬことであることは言うまでもない。その上、右のことが成果に直結することのない場合の方がむしろ多いのであって、収穫は一朝一夕には定位しないにちがいない。しかしこの分野が新しい事実を発掘・提示し、《研究》に膨らみを与え、確実に前進させていることは論をまたない。なまけもので不精な私など、先学の労苦の上にあたかも通説が如き物言いをしてきたのであって、あらためて謝意を表するだけである。

この分野がいかに困難な仕事であり、かつ〈一種の危うさ〉を伴う不安に満ちたものであるかを、東郷克美氏は次の如く述懐している。[注1]

それにしても伝記研究というものはむずかしいと思う。事実を記述するのだから最も確実な仕事であるように見えるが矛盾の総体としての人間をかぎられた事実から復元し描き出す作業は、つねに一種の危うさを伴うといってよい。（傍点鶴谷、以下ことわりなき限り同様とする。）

戸籍名津島修治こと太宰治は、昭和二年四月旧制弘前高等学校へ入学し、同五年三月に卒業している。この時期の太宰治については石上玄一郎の「弘高時代の太宰治」、三浦正次の「太宰治と細胞文芸」、南部農夫治の「回想の太宰治」、平岡敏男の「若き日の太宰治」、津久井信也の「『太宰治』のペンネームについて」等々、おびただしい回想の類を眼にすることが今日可能である。

管見に入った刊本だけでも、大高勝次郎『太宰治の思い出弘高・東大時代』（たいまつ社、'82・3）、石上玄一郎『太宰治と私激浪の青春』（集英社、'86・6）、小野隆祥『太宰治の青春賦』（キリン書房、昭62・6）があり、未見のものを考慮すれば、これ又時空を共有した友人・知人の眼に映じた太宰治のある時期の一面をまざまざと彷彿とさせずにはおかないはずである。

この時期に関する研究面で云えば、相馬正一氏の業績と、山内祥

史氏の精力的な仕事ぶりは避けて通れないであろう。前者は管見によれば「高校時代の太宰治(上)(中)(下)」(『太宰治研究』審美社、昭37・12、昭38・4、12)以来実証的な作業を積み上げ、『若き日の太宰治』(筑摩書房、'68・3)『評伝太宰治第一～三部』(筑摩書房、昭57・5、昭58・7、昭60・7)でそれまでの成果を世に問い、さらに『増補 若き日の太宰治』(津軽書房、'91・5)『評伝太宰治上下』(津軽書房、'95・2)等でその後の新事実を披瀝してきた。後者は緻密、丁寧な書誌的な仕事を積み上げ、ガリ版刷りの「太宰研究」から『近代文学資料4太宰治』(桜楓社、昭45・1)、『人物書誌大系7太宰治』(日外アソシエーツ、'83・7)等上梓してきた。特記すべきことは一九九二年四月に、筑摩書房版『初出全集別巻』に付された「年譜」の細密さであって、氏のエネルギーの旺盛さ、微に入り細に亙る丹念な作業には感心させられたものである。ちなみに最も古い『自叙伝全集』(文潮社、昭23・10)での田中英光の弘前高校時代の「年譜」に記された「昭和二年」を中心とする旧制弘前高校三年間、太宰治十九から二十一歳までの記述は十行の簡略さである。

中学四年修了。弘前高等学校文科に入学し、弘前市富田新町藤田方に止宿した。高校二年のころ、「細胞文芸」を自分で編集し、井伏鱒二、井上幸次郎等、中央文壇の作家にも寄稿してもらひ、創刊号には、辻島衆二の名で、「彼等と其のいとしき母」を発表した。又その頃、青森地方の文学好きの人々の創刊した雑誌「座標」に、大藤熊太のペンネームで「地主一代」等を発表した。

出発点である田中英光の年譜と比較するなら、先に引用した山内祥史氏の手になるものは、弘前高校在籍時だけでもほぼ十一ページ弱、二段組みで一行二十四字×四十八行の一頁、約一万二千五百字に相当するわけだから、まさに今昔の感にたえず、長い時の流れの中で、相馬氏や山内氏、さらには先学の諸氏が眼にみえぬ努力を続けてきたかということは明らかである。

一、現状の〈混乱〉と事実、ある問題提起

〈これらに付け加えるべき何程のことも、筆者にはない。〉と記すのは小山内時雄氏(「旧制高校時代」『解釈と鑑賞』'93・6)であるが、私も又先学諸氏の恩恵のもとに歩みを続けてきた一人である。伝記的事実にはとりわけ暗いことを十二分に承知しているつもりであるが、太宰治の旧制高校時の席次にいつかしらか混乱が生じ、誤りが今日通説となっている感に疑問をおぼえるのである。〈混乱〉と〈再確認〉と題したのは、現状を知り、当時をあらためて追認する意味であり、もし、私の仮説が成り立つならこの時期の太宰治を再考察する必要が生じてくると思うのである。すなわち、マルキシズムとの関わり、生家との葛藤・軋轢、義太夫と芸者遊び、芥川龍之介の来青時・太宰は聴衆の一人として講演を聞いたのかどうか、またその死の衝撃と芥川文学受容の本質、そして初期習作の意味するもの等々である。

弘前高校時代の太宰治の成績については、相馬正一氏の『太宰治』(津軽書房、昭54・6)・『増補若き日の太宰治』(津軽書房、'91・

5）がもっとも詳しい。

一年時は秀才であって、成績上急激な変貌をきたすのは二年時以降のことで三年時はそれに輪をかけるとするのが相馬説であるが、どこかの段階でこの説は微妙に変ってきている。

太宰は英語を第一外国語、独逸語を第二外国語とする甲類（乙類はこの逆）の二組あるうち、一ノ組で、三十八名中で第六席を占めたという。……（中略）……昭和三年三月十五日、二年級に進級、三十五名中第三十一席となった。

こう記すのは先の小山内時雄氏であるが、川崎和啓氏も、浅田高明、山内祥史両氏との鼎談の中で左記の如く述べている。[注2]

例えば、昭和四年十二月（当時三年生）の自殺未遂にしても、成績不振を理由にする向きもありますが、年譜で見ると、彼はすでに一年生終了時に三十五人中第三十一席ですから、その時点ですでに秀才失格です。だからこの時成績を苦にして自殺を図ったというのもちょっとおかしい。

現在入手し得る最もポピュラーとも云うべき新書『太宰治』（岩波書店、'98・5）をものした細谷博氏も同様に成績不振は一年時からとしている。

前年末の十二月二十五日に年号が昭和と改まったばかりの一九二七（昭和二）年七月、弘前高校一年生の修治は芥川龍之介の自殺の報に接し、つよい衝撃を受けます。……（中略）……まもなく、修治は女師匠に義太夫を習い、芸者遊びを始め、学業を放棄し出します。

さらに又、伊藤桀一氏も〈入学時も、文科甲類の三十八名中第六席〉と言って、はばからない。[注3]

端的に言えば、一年秀才、二年以降成績放棄を説いてきた相馬氏の考えに対し、今日では一年時から、〈芥川龍之介の自殺〉が直接の契機となって、学業放棄へとなっているというのが《通説》となりつつある様相なのである。これはどういう事から齟齬が生じてきたのか、あるいは単純な錯覚か、それとも相馬氏が営営とつむいできた作業に何か得心が行かないのか、詳細は不明である。

川崎氏が言う〈年譜〉が誰の手になったものを参考にしたかは定かではないが、一九九二年四月に刊行されていた山内祥史氏の「年譜」（『初出太宰治全集別巻』筑摩書房）[注4]と考えても不当ではあるまい。時期的にも見合うし、質的にもかつてなかったほどの充実をみせているからである。氏の手になる「年譜」で該当するところを以下確認しておく。

昭和二年四月の入学の際には〈十八日、弘前高等学校の入学式が挙行され列席。文科甲類（第一外国語を英語、第二外国語を独逸語とする級）に入学し、一ノ組三十八名中で第六席を占めた。当時の官立高等学校では、文字どおり成績順に座席が決められていた。〉とあり、翌三年、太宰二十歳の項には〈三月十五日、二年級へ進級。二年級では、三十五名中第三十一席となった。〉とされている。三年へ進級した昭和四年は〈三月十五日、三年級へ進級〉とだけ記され、席次は明示されておらず、翌五年三月十五日に〈文科生七十一名中第四十六席で、官立弘前高等学校を卒業した。〉と説かれている。

以上引用した叙述はどうみても、一年次第六席、二年次第三十一席と受けとめざるを得ないもので、とすれば川崎氏の如く〈一年生

終了時〉〈点ですでに秀才失格〉と考えても決しておかしくなく、最大限譲歩しても誤解をまねく記述になっていることは否めない事実である。もっとも、こう書いている私自身、ある資料を入手するまで、相馬氏、山内氏の著作に触れつつ、確たる疑問を抱かないできたことを付言しておく。

太宰治没後五十年、弘前高校時代となると七十年前のこととなり、当時を知る人は数少なくなっているのが現状であろう。まして弘前高等学校がいかなる制度のもとにあったかとなると自明ではありえない。時代にできるだけ語らせるという点で言えば、当時の弘前高校の資料がもっとも有効であろう。太宰在籍時の三年間の、弘前高等学校の内実をうかがえる資料が現存しており、管見ではまだだれも言及しておらぬので、この資料を紹介しつつ、新ためてこの問題を確認、整理してみたいのとするのが本稿の目的である。

二、『弘前高等学校一覧』と「生徒姓名一覧」

私事で恐縮だが平成九年十月一日から同十年三月末日まで、いわゆる国内留学を諸方面の好意により実現することができた。風土の匂い、地域による特質の一端を垣間できたらという程度の軽い気持ちに過ぎなかったし、十月から三月まで腰を落ちつけるということは、ほとんど例がないとのことで、冗談で〈狂人〉だと言われたことがある。

相馬氏はじめ多くの先学の徒が、旧制弘前高校時代については新しい事実を突きつけており、現在では青森県近代文学館に貴重な資料が収集されていることもある。もし何か〈発見〉しても《落ち穂拾い》に過ぎぬと考えていたが、〈混乱〉を示し、事実でないことの方が、いわゆる通説化しつつある現在、問題を投げかけ、私見を述べ世に問うことも必要かも知れぬと思うようになった。現弘前大学図書館の閉架式、また貴重な研究文献が置かれている一室にそれらはあった。率直な印象を言えば、館員の手が足りず、一式が無雑作に保管されていた諸群の中に、ひっそりと忘れ去られたかのように置き去りにされていたのである。

一つは、「綱領」にはじまり、附録の「校友会規則」まで明記したもので、『弘前高等学校一覧（自昭和二年四月至昭和五年三月）』（弘前高等学校、昭2・9、昭3・11、昭4・10）がこれである。いま当面問題とする成績は「学則」中の「成績考査修了及卒業」と、「細則」中の「成績考査細則」とが関係してこよう。前者は第二十八条から三十一条までの四条より成り、次のように規定してある。

第二十八条　学業ノ成績ヲ分チテ学期成績学年成績及卒業成績トス　学期成績ハ学期毎ニ各学科ニ就キ試験及平素ノ課業ノ成績ヲ考査シ且ツ勤惰ヲ参酌シテ之ヲ定ム但シ学科目ノ種類ニ依テハ其ノ全部又ハ一部ノ試験ヲ行ハサルコトアルヘシ

第二十九条　学年成績ハ当該学年ニ於ケル各学期評点ノ和ヲ三除シテ之ヲ定ム卒業成績ハ三学年間ノ成績ヲ考査シテ之ヲ定ム

第三十条　試験成績考査ニ関シテハ別ニ細則ヲ以テ之ヲ定ム

第三十一条　全学科ヲ卒業シタル者ニ対シテハ卒業証書ヲ授与ス卒業証書ノ様式ハ左ノ通之ヲ定ム

卒業証書

府県　族籍　　氏　　名

年　月　日生

校印

右者本校ニ於テ高等科文（理）科ノ学科ヲ修メ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍リ之ヲ証ス

昭和　年　月　日

弘前高等学校長　位勲　爵位

氏　　名　印

「学則」第三十条によって規定されてある「成績考査細則」は、全十三条より成り、次の如く、詳細をきわめている。

第一条　成績ハ評点ニヨル

第二条　評点ハ各科目一百ヲ以テ満点トス

第三条　各科学年ニ於ケル学科目単位左ノ如シ

	第一学年		第二学年		第三学年	
	文科	理科	文科	理科	文科	理科
修身	一	一	一	一	一	一
国語及漢文	二	二	二	一	二	
第一外国語	三	三	三	三	三	三
第二外国語	一	一	一	一	一	一

歴史	一		二			一
地理	一					
哲学概説					一	
心理及論理			一	一	一	
法制及経済		一	一		一	
数学	一	二		二		二三 力学(一)
自然科学	一		一			
物理				一		
化学				一		
植物及動物		一		一		(二)
鉱物及地質		一				
図画		一		一		(一)
体操	一	一	一	一	一	一
合計	一二	一四	一三	一四	一二	一四

備考　本表中、ハ選択科目ニシテ力学及ビ図画又ハ動物及植物ノ何レカヲ選ハシム　独語ヲ以テ入学シタルモノハ独語ヲ第一外国語トシテ課スルトキハ之ヲ一トス

第四条　学期評点ハ学期試験点ニ平常ノ成績出欠席及勤惰ヲ参酌シテ之ヲ定ム

第五条　学期試験ハ各学期末ニ於テ之ヲ行フ　但学科ニヨリ特ニ学校長ノ許可ヲ得テ学期試験ヲ行ハサルコトヲ得

第六条　試験問題ニ就キテハ担任教官ハ学科主任ノ検閲ヲ経

ヘシ

第七条　左ノ学科ニ在テハ学期試験ヲ施行セス　作文、体操、実験、図画中自在画

第八条　担任教官ハ学期試験施行後三日以内ニ評点ヲ報告スヘシ

第九条　学年評点ハ三学期評点ノ和ヲ三除シテ之ヲ定ム

第十条　生徒ノ席次ハ第一学年ニ於テハ入学試験ノ成績ニヨリ其他ニ於テハ前学年ノ成績ヲ按シ同科同類ニツキ之ヲ定ム　但第二外国語ヲ履修セサルモノハ別位ニ置ク

第十一条　試験ヲ欠キタルモノ、試験点ハ零トス　但シ欠試ノ理由正当ナルトキハ当該学科当該期ニ於ケル出席率多キモノニ限リ他ノ二学期当該試験点ノ平均七割以内ヲ以テ当該学期ノ認定試験点トナスコトアルヘシ

第十二条　左ノ各号ノ一ニ該当スルモノニ対シテハ学期認定評点ヲ附与セス

一、停学ノ処分ヲ受ケタル為試験ニ欠席シタルモノ

一、正当ノ理由ナクシテ試験ニ欠席シタルモノ

第十三条　学年成績左ノ条件ニ適合スルモノ及第トス

平均点以上ニシテ総科目数ノ三分ノ一以内六十点未満五十点以上ノモノ　但三分ノ一計算ハ四捨五入トス六十点未満ノ科目中一科ノミ四十点以上五十点未満ナルコトヲ得　全科目数ノ中二科目ノミ四十点以上五十点未満ナルコトヲ得

席次を判断するには、右の「第十条」が一つの判断材料となろう。「本則」「細則」が規定されている『弘前高等学校一覧』中の「生徒氏名」は上段に出身学校、下段に本籍府県名が附された五十音順の名簿であって、これだけでは各自の席次は皆目不明であるが、これとは別に在籍時の成績が明瞭に読みとれる「生徒姓名一覧」が今なお残っている。両者の名簿を参考までに左に示す。ただし文科のみとし、かつ、一部は省略してある。

A　生徒及卒業生（『弘前高等学校一覧自昭和二年四月至昭和三年三月』、弘前高等学校、昭2・9・1）

第一學年
文科第一學級（41名）

開　成　阿部　章弘（群　馬）
臺北第一　石渡　文雄（神奈川）
大　館　伊藤　鞠郎（秋　田）
秋　田　伊藤　光夫（秋　田）
小田原　奥津　眞平（神奈川）
酒　田　小野　良助（山　形）
東京第四　小幡　康哉（千　葉）
弘　前　大高勝次郎（青　森）
京都第一　太田　爲弘（京　都）
秋　田　加賀谷篤一郎（秋　田）
熊　谷　経塚四礎人（富　山）
京都第三　楠　正（京　都）
東奥義塾　工藤　元一（青　森）
足利工　黒沼清次郎（栃　木）
青森商　小泉　静治（青　森）
弘　前　今　儀雄（青　森）
大　館　櫻庭　久雄（秋　田）
白　石　佐藤　新吉（宮　城）
名　寄　佐藤　貞一（新　潟）
磐　城　白井　武夫（福　島）
東京第三　菅原　敏夫（岩　手）
三　次　世良　英夫（廣　嶋）
濱松第一　高部　省吾（静　岡）
青　森　千葉　元江（青　森）
京　華　塚原　肅（滋　賀）
青　森　津島・田　修治・弘宗（青　森）
花　園　富田　（山　梨）
東京第五　中島新太郎（東　京）
釧　路　中西　六三（北海道）
弘　前　成田　哲夫（青　森）
東京第四　東　清英（熊　本）
旅順第一　平瀬　嘉美（山　形）
宇都宮　松澤　義雄（栃　木）
東京第五　松本　眞雄（東　京）
粕　壁　丸山　鼎（埼　玉）
宇都宮　三浦　正次（群　馬）
札幌第二　三田村東一（石　川）
新　發　田　皆川　芳夫（新　潟）
福　嶋　宮下　利一（福　嶋）
麻　布　森本　文雄（千　葉）
東京第一　山本　英一（大　阪）

文科第三學級（39名）

東京第一	赤井　紀夫	（福　嶋）
米　　澤	安部　晋一	（山　形）
眞　　岡	池葉　　惇	（栃　木）
東京第三	井尻喜之祐	（京　都）
順　　天	市川　善宗	（長　野）
横濱第二	岩橋　一雄	（和歌山）
盛　　岡	上田　重彦	（岩　手）
世田ヶ谷	大澤　良範	（福　嶋）
弘　　前	大平　泰治	（青　森）
甲　　府	片桐　謙一	（宮　城）
開　　成	北川義次郎	（東　京）
諏　　訪	久保田周介	（長　野）
弘　　前	小林麟太郎	（青　森）
熊　　谷	小宮　義治	（埼　玉）
福嶋石川	鹿内　健三	（青　森）
新　發　田	佐藤　貫衛	（新　潟）
麻　　布	柴田　數郎	（茨　城）
青　　森	島田　慶司	（青　森）
秋　　田	高橋匡四郎	（秋　田）
龍　ケ　崎	竹内　精一	（茨　城）
神　　通	田中　隆敏	（山　口）
仙臺第一	津久井信也	（栃　木）
成　見　澤	辻村　朔郎	（北海道）
北　　海	徳永　俊夫	（北海道）
東京第七	中山　良男	（東　京）
鶴　　岡	成澤興一郎	（山　形）
弘　　前	鳴海理三郎	（青　森）
麻　　布	廣澤　照彦	（青　森）
小　　樽	藤野　健治	（北海道）
大　　成	保坂　虎雄	（栃　木）
彦　　根	松原五千郎	（滋　賀）
盛　　岡	松本　敬吾	（岩　手）
大　　成	三關幸太郎	（東　京）
弘　　前	宮本　誠三	（青　森）
弘　　前	村井　　等	（岩　手）
青山学院中	安田　修造	（青　森）
伊　　那	矢野　晟輝	（長　野）
順　　天	山下　謙治	（東　京）
札幌師範	吉田外次郎	（北海道）

文科第二學級（40名）

大　田　原	阿久津　壽	（栃　木）
東奥義塾	新谷武四郎	（青　森）
東京第六	池田　五郎	（東　京）
弘　　前	伊藤　正浩	（青　森）
札幌第二	上山　正二	（北海道）
東京第六	小川　潤一	（東　京）
東京第一	加藤　幸蔵	（秋　田）
東　　北	鬼川　　誠	（秋　田）
弘　　前	菊池　　正	（秋　田）
青　　森	木村要次郎	（青　森）
成　　城	栗原泰治郎	（東　京）
佐賀三養基	古賀善次郎	（佐　賀）
成　　城	小坂　亀雄	（東　京）
芝	小林　伸男	（東　京）
宇　都　宮	小林　　満	（栃　木）
東京府第二	西條　俊一	（山　形）
大　田　原	齋藤　武夫	（福　嶋）
岸　和　田	坂口　悌三	（大　阪）
弘　　前	坂田　五郎	（青　森）
大　田　原	坂本　龍太	（栃　木）
青　　森	嶋　　邦男	（青　森）
仙台第一	鈴木喜四郎	（宮　城）
弘　　前	高田　輝雄	（廣　嶋）
一　ノ　関	千葉　長治	（岩　手）
甲　　府	仲澤　一正	（山　梨）
岩　見　澤	南部（名島）農夫治（改）	（北海道）
静岡富士	野村　治郎	（静　岡）
沼　　津	服部　　勲	（静　岡）
函館師範	藤井幸之助	（青　森）
室　　蘭	藤井　周吉	（北海道）
京都第二	松井　　治	（京　都）
弘　　前	三浦徳太郎	（青　森）
弘　　前	三上　貞雄	（青　森）
秋　　田	三國　友治	（秋　田）
室　　蘭	三戸　幹夫	（廣　嶋）
甲　　府	宮地　　進	（山　梨）
甲　　陽	三善　協中	（兵　庫）
福　　嶋	安田　　正	（福　嶋）
錦　　城	吉田　敏夫	（秋　田）
荏　　原	吉田　春雄	（東　京）

B　生徒姓名一覧（弘前高等学校発行年月日不詳）

文科一年一學級

1大高　勝次郎
2今　儀雄
3佐藤　貞一
4小泉　靜治
5東　清英
8菅原　敏夫
9阿部　章弘
10世良　英夫
12工藤　元一
13三浦　正次
14千葉　元江
15富田　弘宗
16津島・修治
17宮下・利一
18松本　眞雄
19加賀谷篤一郎
21山本　英一
22中島　新太郎
23中西　六三
24櫻庭　久雄
25丸山　鼎
26松澤　義雄
27森本　文雄
28小野　良助
29楠　正
30平瀬　喜美
31太田　爲弘
32佐藤　新吉
33高部　省吾
34小幡　康哉

文科一年二學級

2安田　正
4嶋　邦男
5木村要次郎
6齋藤　武夫
7三戸　幹夫
8藤井　周吉
9藤井幸之助
10服部　勲
11小坂　龜雄
12南部農夫治
13阿久津　壽
14吉田　敏夫
15小川　潤一
16三上　貞雄
17加藤　幸藏
21吉田　春雄
22伊藤　正浩
24三善　協中
25宮地　進
26鈴木喜四郎
27新谷武四郎
28三國　友治
29菊池　正
30千葉　長治
31三浦徳太郎
32西條　俊一
33野村　治郎
34小林　滿

文科一年三學級

1三關幸太郎
2上田　重彦
3島田　慶司
4鳴海理三郎
5井尻喜之祐
6小林麟太郎
7安部　晋一
8大澤　良範
9辻村　朔郎
10松原五千郎
11久保田周介
12大平　泰治
13市川　善宗
14片桐　謙一
15田中　隆敏
16小宮　義治
17矢野　晟輝
26保坂　虎雄
27徳永　俊夫
28柴田　敷郎
29松本　敬吾
30鹿内　健三
32吉田外次郎
34岩橋　一雄

Aの「生徒及卒業生」名簿と、Bの「生徒姓名一覧」とを各学年毎に対照し、より正確を期することも考えたが、原理的には同様なので、二年次、三年次は「生徒姓名一覧」のみ掲げると次のようになる。なお、番号（席次）は原簿のママとし、ある段階から省略してある。番号がとんだりしているのは、入学辞退、除籍、休学等のためであろう。

文科三年三學級

1 三關幸太郎
2 竹内　精一
3 大澤　良範
4 辻村　朔郎
5 鳴海理三郎
6 大平　泰治
7 宮本　誠三
8 市川　善宗
9 山下　謙治
10 赤井　紀夫
11 島田　慶司
12 小宮　義治
13 吉田外次郎
14 矢野　晁輝
15 松原五千郎
16 井尻喜之祐
17 徳永　俊夫
18 阿部清治郎
19 廣澤　照彦
20 中山　良男
21 成田(成澤)興一郎
22 片桐　謙一
23 上田　重彦
24 村井　等
25 保坂　虎雄
26 柴田　敷郎
27 鹿内　健三
28 池葉　惇
29 安部　晋一
30 岩橋　一雄
31 髙根　五郎
32 久保田周介
33 佐藤　貫衛
34 太宰友次郎
35 金井　勇
36 紅露　皓一

文科三年二學級

1 新谷武四郎
2 高田　輝雄
3 菊池　正
4 南部農夫治
5 三國　友治
6 齋藤　武夫
7 藤井　周吉
8 千葉　長治
9 三上　貞雄
10 野村　治郎
11 阿久津　壽
12 坂本　龍太
13 西條　俊一
14 小坂　龜雄
15 嶋　邦男
16 上山　正二
17 鈴木喜四郎
18 安田　正
19 服部　勲
20 藤井幸之助
21 小林　満
22 三善　協中
23 小林　伸男
24 吉田　敏夫
25 坂田　二郎
26 三戸　幹夫
27 鬼川　誠
28 三浦徳太郎
29 池田　五郎
30 伊藤　正浩
31 古賀善次郎
33 加藤　幸蔵
34 松井　治

文科三年一學級

1 大高勝次郎
2 東　清英
3 千葉　元江
4 工藤　元一
5 佐藤　貞一
6 皆川　芳夫
7 松本　眞雄
8 小泉　静治
9 石渡　文雄
10 白井　武夫
11 阿部　章弘
12 松澤　義雄
13 塚原　肅
14 菅原　敏夫
15 佐藤　新吉
16 三浦　正次
17 櫻庭　久雄
18 三田村東一
19 奥津　眞平
20 伊藤　鞠郎
21 平瀬　嘉美
22 加賀谷篤一郎
23 高部　省吾
24 成田　哲夫
25 小幡　康哉
26 太田　爲弘
27 伊藤　光夫
28 中島新太郎
29 山本　英一
30 楠　正
31 津島　修治
32 服部　義彦
33 工藤　勇助
34 富田　弘宗
35 宮下　利一
36 家永　英吉
37 諸澤　肅
38 上甲　良雄

文科二年三學級

1 辻村　朔郎
2 竹内　精一
3 大澤　良範
4 小宮　義治
5 市川　善宗
6 鳴海理三郎
7 三關幸太郎
8 大平　泰治
9 山下　謙治
10 宮本　誠三
11 赤井　紀夫
12 徳永　俊夫
13 島田　慶司
14 吉田外次郎
15 松本　敬吾
16 中山　良男
17 井尻喜之祐
18 安部　晋一
19 矢野　晁輝
20 成澤興一郎
21 上田　重彦
22 久保田周介
23 柴田　敷郎
24 岩橋　一雄
25 保坂　虎雄
26 佐藤　貫衛
27 池葉　惇
28 鹿内　健三
29 村井　等
30 廣澤　照彦
31 片桐　謙一
32 松原五千郎
33 小林麟太郎
34 津久井信也
35 高根　五郎
36 藤島　良輔
37 太宰　友次郎
38 阿部　清次郎

文科二年二學級

1 南部農夫治
2 新谷武四郎
3 三國　友治
4 千葉　長治
5 野村　治郎
6 菊池　正
7 齋藤　武夫
8 藤井　周吉
9 小坂　龜雄
10 安田　正
11 阿久津　壽
12 嶋　邦男
13 三上　貞雄
14 鈴木喜四郎
15 三浦徳太郎
16 西條　俊一
17 服部　勲
18 坂田　二郎
19 小林　満
20 加藤　幸蔵
21 三戸　幹夫
22 三善　協中
23 坂本　龍太
24 伊藤　正浩
25 上山　正二
27 吉田　敏夫
28 鬼川　誠
29 古賀善次郎
30 藤井幸之助
31 松井　治
32 木村要次郎
33 小林　伸男
34 池田　五郎
35 栗原泰治郎
36 高田　輝雄
37 新田　七郎

文科二年一學級

1 大高勝次郎
2 東　清英
3 千葉　元江
4 三浦　正次
5 皆川　芳夫
6 津島　修治
7 工藤　元一
8 小泉　静治
9 阿部　章弘
10 菅原　敏夫
11 三田村東一
12 白井　武夫
13 中島新太郎
14 伊藤　鞠郎
15 佐藤　貞一
61 松本　眞雄 (ママ)
17 佐藤　新吉
19 塚原　肅
20 櫻庭　久雄
21 松澤　義雄
22 太田　爲弘
23 奥津　眞平
24 高部　省吾
25 平瀬　嘉美
26 富田　弘宗
27 石渡　文雄
28 楠　正
29 成田　哲夫
30 中西　六三
31 小幡　康哉
32 山本　英一
33 加賀谷篤一郎
35 伊藤　光夫
36 宮下　利一
38 工藤　勇助

「細則」第十条の規定で照らせば、太宰治の成績は入学時一年一学級で十六番、藤田宏、江平林司の名は、先に確認した『一覧』中の生徒名にはすでに記されておらず、入学辞退者と思われるので、それを考慮しても十四番である。ところが文科二年一学級（一年次の成績）は六番と席次を進めており、文科三年一学級（二年次の成績）になって三十一番と急落していることが理解できる。言うまでもないが「生徒姓名一覧」は「学則」と「細則」とで規定された名簿なのであって、太宰治は入学時、文科一年一学級で十六番（見方によっては十三番あるいは十四番、ただし文科甲類一学級と二学級とが如何ような基準でクラス分けをしたものか不明なため、文科一年甲類での席次は不明）を占めている。この席次は〈入学試験ノ成績ニヨリ〉（「細則第十条」）決められたもので、青森中学では秀才であったとしても四年次で受験したことを考慮に入れれば妥当と思われるがいかがであろうか。

二・三年時の席次は同様に「細則第十条」に負っているのであり、端的に言えば、二年時の名簿（席次）は〈前学年ノ成績ヲ按シ同科同類ニ付キ〉〈定ム〉られたもので、二年一学級の第六席は一年時の全成績の徴表である。この資料でみる限り、個人的には急激な変化に見舞われたとしても、それが直ちに成績不振とつながっていないことが理解出来よう。昭和二年七月二十四日の芥川の死は確かに文筆家として身を立てようとしていた太宰治には衝撃を受けたことは《文学上の血族》として十二分に考えられよう。太宰治は晩年、『如是我聞』で〈芥川の苦悩〉とし〈日陰者の苦悶。強さ。聖書。生活の恐怖、敗者の祈り〉を挙げているが、実生活における弱者意識、皮膚感覚の屈折、おびえ、虚構世界（想世界）への渇望は両者に共有していよう。さらに又、自意識及びその過剰ということも終生共通していると思われる。自意識とは〈他人が自分をどういう人間として「評価」しているかという自己像にかかわる（傍点竹田）〉とするのは、竹田青嗣の評言[注5]であるが、小林秀雄の「新人Xへ」に着目しつつ、本質的には〈《私小生活の健康な肉感性》の欠如から派生する剰余〉であると言うのは山崎正純氏である。[注6]いずれも一つのことを言っているので、内側はいわば玉ねぎの芯に他ならず確固たるより所が確信持てぬ人間にとって、側鉛をおろそうとすればするほど空虚な自己を見出すだけにすぎず、観念の《一人踊り》に苦しむのである。とすれば、残されるのは他者の関係性に他ならず、他者の評価ということが気になって仕方がないのではなかろうか。しかしながら、この時期直ちに義大夫への執着・芸者遊びへとのめりこんだという見方は短絡ではないだろうか。高等学校一年時の時は、青森中学時代エネルギーを割いた『蜃気楼』も中断し、いわゆる同人誌類に手を染めていないことも自己の《役割》を使い分けていたと言えるかも知れない。たしかに、太宰治の芥川への憧憬はその作家生活に底流として流れている。この時期の「侏儒楽」が芥川の「朱儒のことば」のもじりであり、「衰蛟」が「雛」との出会いなしには生まれなかったことを忘れてはならない。にもかかわらず、思想性、文学性のどういう点に太宰は芥川をわがものとしようとしたかとなると、研究の余地が大いに残されていよう。両者共、たぐいまれなるストーリー・テラーだけではおそらく不満であり、両者の文学性の同質・異質、文学観の違いのふるいわけは今後に残

一科目中七科目に及んでいる。当時弘前高校では八十点以上は優、七十点台が良、六十点台が可で、六十点未満は落第点となっていた。

科目	評価	備考
修身	56	赤
国語	47	青
漢文	77	及
英語1	68	及
英語2	53	赤
英語3	61	及
西洋史	51	赤
哲学	30	黒
論理学	54	赤
経済学	52	赤
体操	70	及
平均	56.3 / 75.2	落

（『増補若き日の太宰治』）

（弘前大学文理学部保存）

おわりに

今日曖昧化している、弘高時代の席次という微細な一点に絞り、検討を加えてきた。肝心なのは「本則」第二十九条の〈学年成績ハ当該学年ニ於ケル各学期評点ノ和ヲ三除シテ之ヲ定ム卒業成績ハ三学年間ノ成績ヲ考査シテ之ヲ定ム〉という条目と、「細則」第十条中の〈生徒ノ席次ハ第一学年ニ於テハ入学試験ノ成績ニヨリ其他ニ於テハ前学年ノ成績ヲ按シ同科同類ニツキ之ヲ定ム〉という条目とに他ならない。

したがって、津島修治一年次の「第十六席」は入学試験時の成績を示し、二年次の第六席は一年次での成績である。一年次の津島修治がさまざまな〈事件〉に遭遇しつつも、青森中学以来の津島家にはすぎたる秀才という位置を保とうとし、それをやり遂げたことは明白である。それが急激に崩れ出したのが三年次の三十一席、すなわち二年次になってからであり、その時期はあたかも「細胞文芸」という同人誌に傾注し、青森の紅子への通いが頻度をます時期と軌を一にしている。まして〈文科生七十一名中第四十六席〉（山内祥史）で旧制弘前高等学校を卒業したという事実は、一年次の成績が大分貯金となっていて、それがあったためにかろうじて卒業したと言えなくもない。相馬正一氏によれば、その有様はさんたんたるものだったという。

三年になってからはますます下降し、二学期には落第点が十

この稿では入取した「資料」で、〈混乱〉の様相をみせている弘高時代の席次にスポットライトを再びあててみた。結果的には相馬正一氏の従来の主張の正しさを追認したことになるが他意は一切ない。

種々の機会で相馬正一氏は席次や成績について述べているが、初めて「資料」を眼にした時、あらためて氏に書簡で問い合わせたことがある。その時の私信を公にしてかまわないとの許しを得たので、関係する部分を掲げ、この小稿の結びとしたい。（先に述べたことと実質一年ずれることになる。）

入学時の成績　文科甲類（一、二組）全員中十四番で合格。

一年次成績　文甲一ノ組38人中6番
二年次成績　文甲一ノ組35人中31番
三年次成績　文甲全員（71人）中46番

以上は学年末の成績表に記載されているものです。貴兄の名簿は学年の初めに作られるので、前の学年の成績順になりますが、学年末になると多少変更もあります。…（中略）…一年の時の学年末成績が6／38なので、二年次の名簿は当然文甲二ノ一組の六番にランクされます。「一年生終了時に、三十五人中第三十一席」は二年次の誤りです。…（中略）…弘前大学所蔵の㊙成績表は前記の通りです。間違いございません。「秀才失格」は二年になってからです。一年次の学年末の成績も74・5です。学年平均が69・5ですから一応上位の方です。

七月七日　　相馬　正一

注1　東郷克美「解説―研究雑感―」
（『日本文芸資料叢書太宰治Ⅱ』、有精堂出版　昭60・9）
注2　浅田高明／川崎和啓／山内祥史「鼎談評伝太宰治の問題点」
（『解釈と鑑賞』、平5・6）
注3　伊藤榮一「芥川龍之介と青森―太宰は芥川の講演を聞いたか―」
（『太宰治研究3』和泉書院　平成8・7）
注4　同じ号で「昭和二十年」の項を担当した佐藤隆之氏は「注」で〈別巻の山内祥史編年譜に多くの御教示を得ている。〉と記している。
注5　竹田青嗣『「自分」を生きるための思想入門』
（芸文社、92・5）
注6　山崎正純『転形期の太宰治』
（洋々社、'98・1）

※この拙稿は弘前大学（長野隆研究室）と同大学図書館の好意なしには出来なかった。また半年の時を与えてくれた梅光女学院大学と私学研修福祉会、いろいろ助言をいただいた各位、とりわけ相馬正一氏にあらためて謝意を表わしたい。こういう形でプライバシーを公開することにためらいも覚えたが、あくまで研究のためであることを付言しておく。